

種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名	岐阜県における代替技術普及の取り組み ～夏秋トマト栽培における土壌還元消毒法の普及事例～													
発表者名	渡辺秀樹													
誌上	誌名	野菜茶業研究集報												
	巻号等	Vol.	3	No.		p.	43	～ p.	47	西暦	2006	年	3	月
	出版または発行元	独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 野菜茶業研究所												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) 土壌還元消毒法は、従来の太陽熱消毒法より低い温度でも利用できることから、臭化メチル代替の一翼を担う技術として近年注目されている。岐阜県の夏秋トマト栽培において、定植前(春処理)および収穫後(秋処理)に処理したところ、いずれの時期でも褐色根腐病に対して防除効果が認められた。また、標高750mの現地圃場において、5月上旬の処理で褐色根腐病に対して高い防除効果が認められ、その効果は3年間持続した。本法は、低コストで利用可能な環境保全型の技術として、飛騨地域の夏秋トマト産地で普及しつつある。</p>														
(キーワード) 臭化メチル、物理的土壌消毒法、土壌還元消毒法、夏秋トマト、土壌病害														

種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名	市販微生物農薬のダクト散布の適応性													
発表者名	渡辺秀樹・田口義広(アリスト・ライフサイエンス(株))・堀之内勇人・百町満朗(岐阜大学応用生物科学部)													
口頭	発表会名(場所)	第88回関西病虫害研究会大会 奈良県社会福祉総合センター(橿原市)												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2006	年	5	月	19	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	48	No.		p.	3	～ p.	9	西暦	2006	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
分類 ^(注)	1	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) 国内で市販されている7種類の微生物農薬について、暖房機の送風ダクトを利用した散布法への適応性を検討した。3種類のパチルス スプチリス水和剤(ボトキラー水和剤、インプレッション水和剤、バイオワーク水和剤)は、ほ場試験でも均一な飛散が認められ、捕捉コロニー数はボトキラー水和剤が最も多かった。バイオトラスト水和剤も均一な飛散が認められた。一方、バシレックス水和剤、バイオキーパー水和剤およびパータレック水和剤は、ほ場試験での飛散量が少なく本法には適さないと考えられた。</p>														
(キーワード) ダクト散布法、微生物農薬														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上											
題名	市販ELISAキット測定におけるキュウリの測定妨害について												
発表者名	天野昭子・矢野秀治（研究開発課）												
口頭	発表会名 （場所）	関西病虫害研究会 第88回大会 奈良県社会福祉総合センター（橿原市）											
	主催機関	関西病虫害研究会											
	発表月日	西暦	2006	年	5	月	19	日					
誌上	誌名	関西病虫害研究会報											
	巻号等	Vol.	48	No.		p.	136	~ p.		西暦		年	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会											
分類 ^{（注）}	3 =	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
<p>（要旨）市販されているイミダクロプリド測定用キットを用いて、キュウリの測定妨害についてその要因と改善方法を検討した。キュウリ果実を果托、中果皮、および種子を含む胎座の3つの部位に分け、それぞれの抽出液が測定値に与える影響を見たところ、果托からの抽出液が吸光度を抑制しており、妨害となる物質は果托に含まれることが確認された。回収率の改善方法として、抽出液の希釈処理と限外濾過処理について検討した。希釈処理では若干の改善は見られたが、影響の大きかった低濃度添加試料では有効な値にまで改善されなかった。限外濾過処理は、低濃度添加試料でも150%程度までは改善しており、現場でのスクリーニングに用いるには有効と考えられた。</p>													
（キーワード）残留農薬簡易キット、キュウリ、測定妨害、果托、													

種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名	ビニールシートベタがけと施設密閉の併用処理によるコナジラミ類の防除													
発表者名	勝山直樹・桑原圭司（農業技術課）・杖田浩二（病害虫防除所）・福田富幸・越川兼行・田口義広（アリスタ・ライフサイエンス株）													
口頭	発表会名 （場所）	第88回関西病虫害研究会大会 奈良県社会福祉総合センター（橿原市）												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2006	年	5	月	19	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	48	No.		p.	91	~ p.	93	西暦	2006	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
分類 ^{（注）}	1 =	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>（要旨）トマト黄化葉巻病を媒介するシルバーリーフコナジラミの防除を目的に栽培終了時に行われる施設密閉処理の改良法を考案した。即ち、慣行法における施設内の過剰昇温の対策として、トマト株を畦上に倒してビニールシートをベタがけした後、天窗を除いて施設開口部を密閉した。この改良法により4日間処理を行ったところ、施設内気温は慣行法と比較して最大で23℃下がり、施設内の機器類への高温による負荷は低減された。また、ベタがけ被覆下は最高63℃まで上昇し、慣行区と同等のコナジラミ類に対する防除効果が得られた。ただし、本法の防除効果は慣行法より処理中の天候に影響されやすいため、注意を要すると考えられた。</p>														
（キーワード）施設密閉処理、トマト黄化葉巻病、シルバーリーフコナジラミ														

種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名	イチゴ新品種の最新情報 イチゴ・美濃娘													
発表者名	越川兼行													
誌上	誌名	農耕と園芸												
	巻号等	Vol.	6	No.		p.	42	~ p.	43	西暦	2006	年	6	月
	出版または発行元	誠文堂新光社												
分類 ^(注)	4	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
(要旨) 「美濃娘」の育成経過、品種特性、特性を活かした栽培法及び17年度の普及状況について記述した。														
(キーワード) イチゴ、美濃娘、促成栽培														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上										
題名	ゼラニウム茎腐病菌 <i>Pythium irregulare</i> の伝染環											
発表者名	渡辺秀樹・堀之内勇人・市原志信(農業技術課)・桑原圭司(農業技術課)・山田貴子(西濃地域農改)・景山幸二(岐阜大学)											
口頭	発表会名 (場所)	平成18年度日本植物病理学会 本大会 札幌コンベンションセンター(札幌市)										
	主催機関	日本植物病理学会										
	発表月日	西暦	2006	年	6	月	5	日				
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他					
(要旨) 2005年2月に、岐阜県内の複数の鉢花生産施設でゼラニウムの地際茎が暗褐色水浸状に腐敗する被害が多発生した。その病原菌について調べた結果、いずれも <i>Pythium irregulare</i> であることを明らかにした(2005年関西西部会)。そこで、これらの施設における本菌の伝染環について検討した。灌水用水源、培養土、施設外の培養土置き場周辺の土壌および幼苗から菌の分離を行ったところ、本菌は灌水用水源以外のサンプルから分離された。また、栽培ベンチ上の排液からも本菌が分離されたことから、養液により伝染が拡大していると考えられた。さらに、ゼラニウム栽培期間前後に栽培されているエキザカム、ガーベラにも生育不良株、萎凋株が発生したため、罹病根からの分離を行ったところ本菌が高頻度で分離された、このことから、本菌はゼラニウム栽培期間以外にも、他の品目を宿主としながら施設内を経年伝染している可能性も示唆された。												
(キーワード) ゼラニウム、茎腐病、 <i>Pythium irregulare</i> 、伝染環												

種別	1	1. 口頭、2. 誌上						
題名	植物生育促進菌類 <i>Fusarium equiseti</i> とペーパーポットを組み合わせたハウレンソウ萎凋病の防除効果							
発表者名	堀之内勇人・百町満朗（岐阜大応生）							
口頭	発表会名 （場所）	平成18年度日本植物病理学会大会 札幌コンベンションセンター（札幌市）						
	主催機関	日本植物病理学会						
	発表月日	西暦	2006	年	6	月	5	日
分類 ^{（注）}	3	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他			
<p>（要旨）</p> <p>播種時に培養土を入れた2種類のペーパーポット（V4:径3.8cm×高さ5.0cm；VR264:径3.0cm×高さ3.8cm）に <i>F. equiseti</i> の孢子懸濁液を灌注処理した。14日間育苗した苗をハウレンソウ萎凋病の汚染土に定植し、28日後に外観の発病を調査した。萎凋病の発病は2回試験とも <i>F. equiseti</i> を処理することで抑制され、V4との組み合わせで最も発病抑制効果が高かった。ペーパーポット内の土壌中の病原菌量はV4とVR264のいずれのポットを用いても、<i>F. equiseti</i> を処理するとほぼ1/4に減少した。さらに <i>F. equiseti</i> を処理したV4区はVR264区と比較して病原菌量は1/8と少なく、<i>F. equiseti</i> の菌量は1.8倍高かった。このことは <i>F. equiseti</i> を処理したV4区で最も発病が少なかった要因と考えられた。</p>								
（キーワード）ハウレンソウ萎凋病菌、 <i>Fusarium equiseti</i> 、ペーパーポット、生物防除								

種別	1	1. 口頭、2. 誌上						
題名 （原著）	Investigation of the seasonal variation in emergence of phytoplankton and the pesticide outflow into the paddy drainage （水田排水路に生息する植物プランクトンの消長と、流出農薬について）							
発表者名 （原著）	天野昭子・矢野秀治（研究開発課）・小林忠彦							
口頭	発表会名 （場所）	11th IUPAC international congress of pesticide chemistry （神戸市）						
	主催機関	IUPAC（国際純正応用化学連合）、日本農薬学会						
	発表月日	西暦	2006	年	8	月	9	日
分類 ^{（注）}	3	1. 学術論文 3. 講演・報告			2. 学術図書 4. その他			
<p>（要旨）水田排水路に生息する植物プランクトンを大別すると、珪藻類（8種類）、緑藻類（9種類）、藍藻類（4種類）に分けられた。特に珪藻類は調査期間を通して優先的に生息していた。プランクトンの増加ピークは5月末と8月上旬に認められた。調査期間中に検出された農薬は、5月から6月に除草剤（ベンチオカーブとメフェナセット）、8月は殺虫剤（BPMC）が確認された。除草剤の流出時期に植物プランクトンの生息量は減少していたが、これが除草剤の影響によるものかどうかは定かではない。また、植物プランクトンの増加は、水田からの水の流入に大きく起因すると推測される。減少後の植物プランクトンは、死滅することなく計測して生息していたことから、流出農薬の影響は大きくないと考えられる。</p>								
（キーワード）水田排水路、植物プランクトン、発消長、流出農薬								

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	Fruit-specific V-ATPase Suppression in Antisense-Transgenic Tomato Leads Smaller Fruits with Few Seeds.													
発表者名 (原著)	雨宮剛、金山喜則、山田邦夫、山木昭平、白武勝裕													
口頭	発表会名 (場所)	27th International Horticultural Congress & Exhibition (IHC2006) (大韓民国ソウル市COEXコンベンションセンター)												
	主催機関	International Society for Horticultural Science (ISHS)												
	発表月日	西暦	2006	年	8	月	17	日						
誌上	誌名	27th International Horticultural Congress & Exhibition Abstracts												
	巻号等	Vol.		No.		p.	331	~ p.		西暦	2006	年	8	月
	出版または発行元	International Society for Horticultural Science (ISHS)												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) 果実液胞は果実の品質に関わる様々な溶質を高濃度に蓄積するが、濃度勾配に逆らった液胞内への物質蓄積には液胞膜に存在する多くの輸送体の働きが不可欠である。本研究では多くの輸送体に駆動力を与えると考えられているプロトンポンプ(V-ATPase)の発現を果実特異的に抑制した形質転換トマトを作出した。その結果、形質転換トマトは果実が小さくなり、種子数も著しく減少した。さらに、果実品質において最も重要な要素の一つである糖含量および糖組成にも変化が見られた。これらの結果により、V-ATPaseが果実の肥大成長だけでなく、種子形成や液胞内の物質集積にも重要な働きを担っていることが明らかになった。</p>														
(キーワード) fruit growth, gene suppression, seed formation, tomato, vacuolar H ⁺ -ATPase														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	夏秋イチゴの可搬式高設ベンチの開発													
発表者名	越川兼行、安田雅晴、後藤大輔(全農岐阜)、鈴木滋雄(全農岐阜)、石川誠治(全農岐阜)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会東海支部 クリエート浜松(浜松市)												
	主催機関	園芸学会東海支部												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	1	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌												
	巻号等	Vol.	76	No.		p.		~ p.		西暦	2007	年	3	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) 夏秋イチゴは、冬期に豪雪で知られる地域で栽培されている。高設ベンチの栽培槽が取り付けられる水平の直管パイプは、積雪荷重や融雪時の引っ張りにより被害を受け高設ベンチが倒壊する。本研究では冬期には撤去できる可搬式高設ベンチの栽培試験を現地で行ったので報告する。栽培槽は高設ベンチ「岐阜県方式」の不織布製桶状少量培地栽培槽を用いた軽量なものとし、栽培槽を支える水平直管をS字フック等で簡便に着脱できるようにした。培地量が少なく蓄熱部分が少ないことから、朝には20℃を下回ることがあり、イチゴの根の生育適温に近く経過した。17年度の収量は、7月中旬から10月下旬までの収穫期間で2,774kg/10aであった。夏秋イチゴ栽培では昇温防止対策、脇芽の整理・摘果等の栽培技術の確立及び天敵利用等を今後検討する必要がある。</p>														
(キーワード) 夏秋イチゴ、養液栽培、高設ベンチ、可搬式、雪害対策														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	カキのカロテノイド生合成系酵素遺伝子の発現に及ぼす 1 - メチルシクロプロペンの影響													
発表者名	新川 猛、尾関 健、加藤雅也（農研機構果樹研究所、現静岡大農学部）、生駒吉識（農研機構果樹研究所）													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会東海支部 クリエート浜松（浜松市）												
	主催機関	園芸学会東海支部												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	1	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌（掲載予定）												
	巻号等	Vol.	76	No.	別 1	p.		~ p.		西暦	2007	年	3	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) 1 - メチルシクロプロペンは、カキにおいて顕著な軟化抑制効果を持ち、実用化後（現在農薬登録申請中）には果樹生産現場においての利用が期待される薬剤である。本剤は果実の成熟老化に関連深い植物ホルモンの一種であるエチレンの作用を阻害することから、カキの色素であり機能性成分でもあるカロテノイドの蓄積に影響することが懸念される。そこで、1 - メチルシクロプロペン処理後の果実中のカロテノイドの含有量の推移とカロテノイド生合成系酵素遺伝子の発現解析を行ったところ、処理の有無による蓄積並びに遺伝子発現への影響は小さく、カロテノイドの合成・代謝には明確な影響を及ぼさないことが判明した。</p>														
(キーワード) カロテノイド、1 - メチルシクロプロペン、リアルタイムPCR														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	キンセンカ属の種間雑種植物から複二倍体植物の作出													
発表者名	宇次原清尚、加藤克彦、雨宮 剛													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会東海支部 (浜松市)												
	主催機関	園芸学会東海支部												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	1	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌												
	巻号等	Vol.	76	No.		p.		~ p.		西暦	2007	年	3	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) <i>Calendula officinalis</i> と <i>C. arvensis</i> の雑種植物は0.1程度のコルヒチン処理により容易に複二倍体植物の作出が可能であった。処理は生育旺盛な状況で温度をやや高くする必要があったと考えられた。複二倍体植物の後代は、這い性で花の大きさが <i>C. arvensis</i> より大きいことから、冬期の花壇用花材として利用可能と考えられる。また、この雑種植物及びコルヒチン処理に得られた植物と <i>C. officinalis</i> 及び <i>C. arvensis</i> との交雑により比較的容易に種子を得ることが可能で、交雑により新しい形質の植物育成が可能であると考えられる。</p>														
(キーワード) <i>Calendula</i> 、コルヒチン処理、複二倍体植物														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	15Nトレーサー法によるカキの葉面散布における窒素の結果母枝間の移行													
発表者名	尾関健、新川猛、梅宮善章（農研機構果樹研）													
口頭	発表会名 （場所）	平成18年度園芸学会秋季大会 長崎大学（長崎市）												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	24	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌												
	巻号等	Vol.	75	No.	2	p.	488	~ p.		西暦	2006	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^{（注）}	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>（要旨） カキ‘富有’の結果母枝先端の着果している新梢に、果実にかからないように¹⁵N標識硫酸100ppm（31.2atom%）養液を7月、9月及び翌6月に散布し、処理後30日における同位体窒素の結果母枝間の転流移行について検討した。その結果、各処理時期とも処理枝における果実とヘタへの窒素の吸収移行は確認された。先端より2番目の発生新梢には葉と果実への微量の移行が確認されたが、その有無は時期により差があった。一方、結果母枝間では窒素の移行は確認できなかった。以上により、葉面散布による窒素の吸収移行は、処理30日後において結果母枝内の移行はあっても、結果母枝間の移行はないと考えられた。</p>														
（キーワード）カキ、同位体窒素、葉面散布、窒素転流														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	カキ粉末の作成工程の違いによる抗酸化ビタミン含量の変化													
発表者名	新川 猛、尾関 健、加藤雅也（農研機構果樹研究所、現静岡大農学部）、生駒吉識（農研機構果樹研究所）、三宅紀子（新潟薬大応用生命科学部）、倉田忠男（新潟薬大応用生命科学部）													
口頭	発表会名 （場所）	平成18年度園芸学会秋季大会 長崎大学												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	24	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌												
	巻号等	Vol.	75	No.	別2	p.	432	~ p.		西暦	2006	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^{（注）}	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>（要旨）カキ果実を用いて食品原料として利用範囲の広い粉末化を行い、その作成工程の違いが粉末中の抗酸化ビタミン（カロテノイド、アスコルビン酸）含量に及ぼす影響について明らかとした。UV-Aの照射は、カロテノイド含量を減少させることから、粉末作成は極力暗黒下で行うとともに保存も遮光する必要がある。乾燥時間の延長ならびに原料果実の高温保存は、カロテノイド含量を増加させ、両方の組み合わせにより約50%増加する。但しアスコルビン酸については、マイナスイオン要因であった。これらの方法でカロテノイド含量は最大40mg/100gd.w.、アスコルビン酸含量は322mg/100gd.w.の粉末の作出が可能となった。</p>														
（キーワード）カキ粉末、カロテノイド、アスコルビン酸														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	不織布製ポットを利用したトマト独立ポット耕栽培 (第3報) 生育ステージと養分吸収量との関係													
発表者名	安田雅晴、越川兼行、勝山直樹													
口頭	発表会名 (場所)	平成18年度園芸学会秋季大会 長崎大学(長崎市)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	24	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌												
	巻号等	Vol.	75	No.	2	p.	557	~ p.		西暦	2006	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) トマトの独立ポット耕栽培において、生育ステージ毎の養分吸収量を明らかにし、適切な養液管理を検討した。9月25日(播種)から7月8日までの栽培で、EC設定の違う2試験区を設け、約1ヶ月毎に部位別に採取し、乾物率、N、P、K、Ca、Mgの各成分含有率を調査し、乾物生産量及び養分吸収量を算出した。乾物生産量、N、P、Kの吸収量は経時的に増加し、Ca、Mgの吸収量は増加傾向であったが、2~3月に一時的に減少した。Nを基準にした各成分吸収量の相対値は、P、Kが経時的に高まり、4月以降低くなり、Ca、Mgは、P、Kと逆の傾向であった。生育ステージにより使用する培養液処方を変更することが考えられた。</p>														
(キーワード) トマト、養液栽培、高設ベンチ、ポット栽培、独立ポット耕														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	不織布製ポットを利用したトマト独立ポット耕栽培 (第2報) 培養液濃度が生育、収量に及ぼす影響													
発表者名	安田雅晴、越川兼行、勝山直樹													
口頭	発表会名 (場所)	平成18年度園芸学会秋季大会 長崎大学(長崎市)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	24	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌												
	巻号等	Vol.	75	No.	2	p.	556	~ p.		西暦	2006	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) トマトの独立ポット耕栽培における適切な培養液濃度を検討した。培養液処方は山崎トマト処方に準じ、定植後のEC値を0.6 dS/m、第1花房開花期より順次上げ、最高で1.4dS/m、以後高温期に1.2dS/mまで下げる標準区、EC値が標準区の1.3倍となるよう管理する高濃度区とを設け、生育、収量等を比較した。その結果、収穫始め頃までは、高濃度区のEC設定値、以後は標準区のEC設定値、6月以降の高温期は標準区のEC設定値よりも低くする必要があると考えられた。</p>														
(キーワード) トマト、養液栽培、高設ベンチ、ポット栽培、独立ポット耕														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	不織布製ポットを利用したトマト独立ポット耕栽培 (第1報) 培地量が生育、収量に及ぼす影響													
発表者名	越川兼行、安田雅晴、勝山直樹													
口頭	発表会名 (場所)	平成18年度園芸学会秋季大会 長崎大学(長崎市)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2006	年	9	月	24	日						
誌上	誌名	園芸学雑誌												
	巻号等	Vol.	75	No.	2	p.	555	~ p.		西暦	2006	年	9	月
	出版または発行元	園芸学会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
(要旨) 作業性を良好にするためベンチ方式とし、病害の伝搬を防ぐために1株ごとの培地とした独立ポット耕の構造を解説した。第1報ではポットの大きさと培地量を検討した。4号ポットと5号ポットでは5号ポットが収量多く、平均果重も大きくなった。5号ポットではトマトの根が盛り上がり灌水チューブの点滴口に入り込み、チューブの詰まりが生じた。そこで5号ポットでの培地量を検討した結果ポット当たり1150mlと1300mlでは収量差がなく、長期多段栽培で36t/10aを得た。														
(キーワード) トマト、養液栽培、高設ベンチ、ポット栽培、独立ポット耕														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	カキ粉末の作成工程の違いによる抗酸化ビタミン含量の変化													
発表者名	新川 猛、尾関 健、加藤雅也(静岡大農学部)、生駒吉識(農研機構果樹研究所)													
口頭	発表会名 (場所)	ークリプトキサンチン談話会 (静岡グランシップ)												
	主催機関	独立行政法人農業・食品産業技術研究機構 果樹研究所												
	発表月日	西暦	2006	年	10	月	24	日						
誌上	誌名	ークリプトキサンチン談話会要旨集												
	巻号等	Vol.		No.		p.	39	~ p.	40	西暦	2006	年	10	月
	出版または発行元	果樹研究所												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
(要旨) カキに含まれる抗酸化成分の一つであるカロテノイドについて、成熟に伴う蓄積機構を解明するとともに、流通中ならびに加工過程での挙動について明らかとした。成熟中は、果皮色の変化にともない蓄積する種類が異なり、10月はキサントフィル類が、11月はリコペンが蓄積する。流通中では高い保存温度で、蓄積が活発でキサントフィルならびにリコペンが2~3倍に増加する。カキの加工については、原料の保存温度・乾燥時間等の延長によって最大約40mg/100gFWのカロテノイドを含有する粉末の作出が可能となった。														
(キーワード) カキ、キサントフィル、リコペン、リアルタイムRT-PCR、粉末														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上									
題名	Phytophthora sp. によるキク疫病の発生（病原菌追加）										
発表者名	渡辺秀樹・堀之内勇人・市原志信（農業技術課）・桑原圭司（農業技術課）・渡辺克己（中濃地域農改）・景山幸二（岐阜大学）										
口頭	発表会名（場所）	平成18年度日本植物病理学会 関西部会 京都大学(京都市)									
	主催機関	日本植物病理学会									
	発表月日	西暦	2006	年	10	月	28	日			
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他				
<p>（要旨）岐阜県内の鉢花生産農家において、2003年頃から夏期（7月上～8月下旬）にポットマムの地際茎が暗褐色水浸状に腐敗する被害が発生している。罹病組織から1種類のPhytophthora属菌が高率に分離され、接種により病徴が再現された。分離菌株は、乳頭突起を有しない卵形の遊走子のうを形成し、非脱落性、遊走子のう内部から新たな遊走子のうを貫性した。単独培養で有性器官を形成し、蔵卵器は表面平滑、大きさは平均37μmで、蔵精器は主に蔵卵器基部に側着した。また、球形の厚膜胞子および不定形のHyphal swellingsを豊富に形成した。菌糸生育は5～35℃で認められ、最適温度は28℃前後であった。これらの特徴は既報のキク疫病菌<i>P. cactorum</i>とは明らかに異なっていた。そこで、rDNA-ITS領域の塩基配列から系統樹を作成したところ、本菌株と相同性の高い種は認められなかった。これらのことから、本菌は新種の可能性が考えられ、今後さらに検討が必要である。</p>											
（キーワード）キク、ポットマム、疫病、Phytophthora sp.											

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	平成18年豪雪の茶樹への影響													
発表者名	米山誠一・神谷直人													
口頭	発表会名（場所）	茶業技術研究発表会 宮美殿（静岡県島田市）												
	主催機関	日本茶業技術協会												
	発表月日	西暦	2006	年	11	月	14	日						
誌上	誌名	茶業研究報告（別冊）												
	巻号等	Vol.	102	No.		p.	168	～ p.	169	西暦	2006	年	11	月
	出版または発行元	日本茶業技術協会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>（要旨）平成17年12月から翌1月の記録的な低温と積雪により、茶樹枝条の折損、樹形の乱れや赤枯れが広く発生した。この、茶樹被害の一端をとりまとめた。4年生‘やぶきた’では株割れ株率が23%であり、系統により被害の程度が異なった。成木では折損枝重量に品種間差が見られた。一方、仕立て方や樹勢も被害程度に影響すると考えられた。融雪後生じた越冬葉の褐変は、長期間積雪下におかれたことによる凍害と判断された。冬芽の凍害被害芽率は品種により50%前後となり、一番茶収量への影響が大きかった。被害後の茶樹生育の回復について、継続した調査が必要であった。</p>														
（キーワード）チャ、雪害、赤枯れ、凍害														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	イネ粉剤の農薬飛散量調査方法について													
発表者名	須賀しのぶ、天野昭子、澤野定憲													
口頭	発表会名 (場所)	第29回農薬残留分析研究会 (大阪市)												
	主催機関	日本農薬学会・農薬残留分析研究会												
	発表月日	西暦	2006	年	11	月	21	日						
誌上	誌名	第29回農薬残留分析研究会講演資料集												
	巻号等	Vol.		No.		p.	98	~ p.	100	西暦	2006	年	11	月
	出版または発行元	日本農薬学会・農薬残留分析研究会												
分類 ^(注)	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) 農薬散布時の飛散(ドリフト)調査が各地で行われているが、パイプダスタを用いた粉剤ドリフト調査は試験例が少なく調査方法自体が確立されていないため、ろ紙を用いた粉剤の捕獲方法について、ろ紙の形状とろ紙への処理方法を検討した。室内試験結果から、形状による薬剤捕獲量の差は少なく、処理方法では薬剤トラップ率、抽出方法等からエチレングリコール処理が適していると考えられた。野外試験では近距離の場合、形状や処理方法によっては飛散量を過小評価する可能性が考えられた。ただし、室内試験結果と異なる傾向もみられ、ろ紙の設置方法や環境条件の影響があったと考えられた。</p>														
(キーワード) 農薬飛散(ドリフト)、粉剤、イネ、ろ紙トラップ														

種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	フェニトロチオン及びイミダクロプリド測定用 ELISA キットにおけるキュウリのマトリクス効果について													
発表者名 (原著)	天野昭子・矢野秀治(研究開発課)													
誌上	誌名	日本農薬学会誌												
	巻号等	Vol.	31	No.	4	p.	425	~ p.	430	西暦	2006	年	11	月
	出版または発行元	日本農薬学会												
	分類 ^(注)	1	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
<p>(要旨) 市販のフェニトロチオン測定キット(高感度タイプ)及びイミダクロプリド測定キットを用い、キュウリ測定時のマトリクス効果について調査した。キュウリの実試料では、薬剤の低濃度添加の場合に回収率が150%を超え、実用的ではない結果となった。 キュウリ果実を、外果皮を含む果托、中果皮及び種子を含む胎座に分け、各抽出液が測定値に与える影響を見たところ、果托の抽出液が吸光度値を大きく抑制していた。これはフェニトロチオンの測定で特に顕著であった。試料の希釈液を限外濾過膜で処理したところ、回収率は大きく改善された。</p>														
(キーワード) ELISAキット、マトリクス効果、キュウリ、イミダクロプリド、フェニトロチオン、果托														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	簡易分析キット（ELISA法）測定におけるハウレンソウのマトリクス効果について													
発表者名	天野昭子、須賀しのぶ、澤野定憲													
口頭	発表会名 （場所）	第29回農薬残留分析研究会 （大阪市）												
	主催機関	日本農薬学会・農薬残留分析研究会												
	発表月日	西暦	2006	年	11	月	21	日						
誌上	誌名	第29回農薬残留分析研究会講演資料集												
	巻号等	Vol.		No.		p.	43	~ p.	46	西暦	2006	年	11	月
	出版または発行元	日本農薬学会・農薬残留分析研究会												
分類 ^{（注）}	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>（要旨） ELISA法を利用した簡易測定キットでは、作物体由来のマトリクス効果により擬陽性反応を示すことが問題となっている。ハウレンソウは特にこのマトリクス効果が大きく、その程度は市販キットの種類によって異なっており、フェニトロチオン測定用キットはより大きな影響を受けていた。マトリクス効果を起こす原因物質は、限外濾過処理（分画分子量10000）で除去された。また、濾過処理効果は水希釈した試料でのみ認められ、メタノール抽出液の処理では効果がなかったことから、試料溶液中に浮遊する非水溶性物質であると推測された。</p>														
（キーワード）農薬簡易分析キット、ハウレンソウ、マトリクス効果、限外濾過														

種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名	カキのカロテノイド蓄積及び生合成系酵素遺伝子の発現特性													
発表者名	新川 猛、尾関 健、加藤雅也（静岡大農学部）、生駒吉識（農研機構果樹研究所）													
口頭	発表会名 （場所）	平成18年度果樹バイテク研究会 大広苑（広島県竹原市）												
	主催機関	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所												
	発表月日	西暦	2006	年	12	月	5	日						
誌上	誌名	果樹バイテク研究会発表要旨集												
	巻号等	Vol.		No.		p.	35	~ p.		西暦	2006	年	12	月
	出版または発行元	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所												
分類 ^{（注）}	3	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他							
<p>（要旨）気候温暖化にともなうカキの着色遅延機構の解明ならびに機能性成分の高含有化のために、カロテノイド生合成系酵素遺伝子の発現解析を行い、カロテノイドの蓄積様式について明らかとした。カロテノイドの蓄積は、生合成が低調で蓄積があまり起こらない時期。生合成遺伝子の一斉上昇が起こり、蓄積・代謝が活発な時期。リコペン上部の酵素遺伝子の更なる発現上昇によりリコペンを特異的に蓄積する時期。の3つのパターンに分類することができる。収穫後の果実も高温により、カロテノイドの蓄積・代謝が活発であることから、高温はカロテノイド特にキサントフィル類の蓄積・代謝に及ぼす影響が大きいものと考えられた。</p>														
（キーワード）カキ、キサントフィル、リコペン、リアルタイムRT-PCR、発現解析														